

三年目の栽培が始まった「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の綿畑には、今年も毎週末たくさんのボランティアが作業に訪れています。リピーターも多く、畑での再会を喜ぶ姿も見られます。今年は、いわき市、広野町を含めた計二十一カ所(約二畝)での栽培です。有機認証を受けた圃場を持つ農家が四人に増え、「オーガニックコットン」として有機認証を取得するための準備態勢も整いつつあります。

今年のJKSKボランティアバスツアーは年四回。六月一日の種まき、

東北復興日記

92



ヨウデザイン代表
伊藤陽子さん

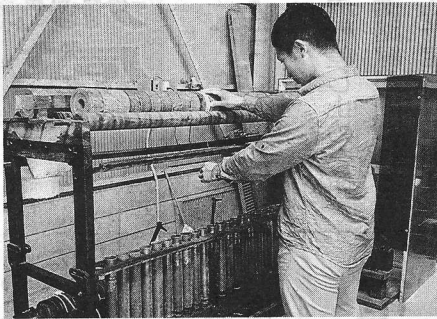
福島コットン魅力アピール

夏の草取り、秋の収穫と続きます。綿畑での作業に加え、綿の繊維への製造工程の一部を見学するほか、糸車での糸紡ぎ体験等も予定しています。震災後の農業再生のた

めに和綿の栽培を始めたこのプロジェクトは、小さくてもブレのない産業を作ろうと、原材料の栽培から加工、製品の販売まで全工程を地元で行うことを目指しています。

写真には、既に稼働している綿繰り機とカードで加工された原綿を糸にする工程を担います。電動式ですが木枠で組まれた昭和初期のレトロな器具で、現代の洋式紡績機では使えない短い落ち綿

たくさんの方にTシャツなど手に取っていただき売り上げも好調でした。その売り場には「被災地支援」の文字はなく、堂々と「FUKUSHIMA COTTON」の看板が掲げられました。原発事故の収束しない福島での取り組みの道筋はまだ長く厳しい一方、プロジェクトは製品自体の魅力が問われる次のステージに移っていることを感じました。



私も、ボランティアとして畑作業に加わり、デザインとして製品づくりに関わっています。昨年末に導入され、目下メンテナンス中のガラ紡機

期間限定販売では、連日先日の日本橋三越での

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。